

が有効に機能したと推測された。中学校の2型糖尿病の発見率は1型糖尿病の7倍以上であった。発見された2型糖尿病は、1型比べて明らかに肥満傾向が強かった。今後の課題は、1次精検、2次精検未受診者をなくすこと、医療機関での2次精検での精度の向上等である。

## 9 新潟県における小児期発症1型糖尿病コホート調査報告～4年間の経過～

長崎 啓祐・菊池 透・樋浦 誠

小川 洋平・内山 聖

新潟大学大学院医歯学総合研究科

小児科学分野

新潟小児糖尿病調査委員会

新潟県小児期発症1型糖尿病コホート調査の4年間の結果を報告する。

【対象と方法】18歳以下の新規発症患児を、県内の小児科医あるいは糖尿病学会専門医が勤務する医療機関へのアンケート調査をもとに行い、主治医に対して各年毎に3ヶ月毎の身体計測値、HbA1c インスリン注射法や投与量などに対して、郵送によるアンケート調査を行った。

【結果】新潟県における15歳未満の1型糖尿病発症率は1.98人/10万人/年であり過去の日本の報告と変わりなかった。新規発症は女児の方が多く、小学校高学年から中学生が多かった。高校生の発症は少なかった。県内での地域差がみられ、佐渡、下越地方に多い傾向があったが症例の蓄積が必要である。学校検尿での発見が30%もあり、比較的早期に見つかっている症例が多かった。4年間の経過中に女児では中学生以降にHbA1cが悪化する症例が多くみられた。今後も引き続き調査を行っていく予定である。

## 10 小児糖尿病サマーキャンプにおける評価シートを用いた患者教育の試み

小川 洋平・菊池 透・長崎 啓祐

樋浦 誠・内山 聖

新潟大学大学院医歯学総合研究科

内部環境医学講座小児科学分野

【目的】小児糖尿病キャンプに参加した患児が統一された方法で指導を受けることにより血糖コントロール・QOLが改善することを明らかにする。またキャンプを通しての教育効果を評価シートで客観的に評価できるか明らかにする。

【方法】対象は第22回新潟小児糖尿病キャンプ参加患児16名(男子7名女子9名)。患児を4グループに分け、それぞれにチーフ医師を割り当てた。各チーフ医師は統一した評価シートを使用し、各項目(食事療法、自己注射手技、低血糖時の対応、集団行動等)ごとの評価を行った。それにより指導すべき事項を明確にし、重点的に指導した。キャンプ前半と後半の評価シートのスコアを比較した。

【結果】各項目とも有意な差は認めないが前半より後半のスコアが改善している傾向があり、キャンプ初参加者においてより強かった。

【考案】非専門医であっても統一した方法で指導にあたれば、血糖コントロール・QOLが改善することが予想される。

## 11 DM 食事の振り返り外来のまとめ

清水マチ子

舟江病院

今年は果物、油、塩分 について、アンケート形式で記載してもらい、その後改善するための学習プリントを渡した。今回は3種類のとりかたの実態をまとめてみた。果物は各季節毎に良く食べるものの量と果物をとる頻度を調査。68%が毎日果物を食べており、少なめは西瓜とイチゴで、多めはメロン、柿、りんごであった。油はパン、サラダ、野菜炒め、揚げ物のとりかたを調査した。パンにはバターマーガリンをつけている人が多く、サラダはマヨネーズとノンオイルドレッシングが

